

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 里 隆光

平成二十二年を迎え、謹んでお祝辞を申し上げます。

旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡巡り・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年度の協会へのご来訪者は、県内外から三千人を超えました。また、平成元年以来発刊してまいりました、特集「ながさきの空」も本年で第二十一集となります。

本年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献したいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十二年

寅（虎）年に因んで

越中 哲也

謹んで新年の御祝詞を申し上げます

嘉永四年正月（一八五一）長崎の住人・医師であり、文学をこよなく愛した高宮榮齋は「長崎萬歳」を著わし、「長崎の新春・大いに榮ゆべし」と賀詞を述べ、其の序文の終りに次の句を載せている。

ありのまま 春は来にけり 福寿艸

今年も古代の暦法（旧暦）によると庚寅の年であると記してある。前回にも記したが、古代の暦法が我が国に伝えられたのは、漢字が朝鮮経由で我が国に伝えられた三世紀末から四世紀にかけてであろうとされている。

中国の暦法は、十干と十二支を組み合わせて成立しているが、其の暦法が成立した時期については前漢の初期、つまり紀元前二〇〇年頃には



長崎刺繍 寅（嘉勢照太先生指導長崎刺繍塾制作）

の役人（牛頭馬頭）は虎の皮の褌をして、地獄に落ちてくる亡者（餓鬼）を苦しめているし、我が国では加藤清正と虎の話は有名である。清正は幼名を虎之助・豊臣秀吉の命で朝鮮に出兵した時、家臣の上月左膳と愛馬が虎におそわれたので虎退治を思いたち絵本にあるように日本号の槍を揮って大いに虎を退治したという。

さて、我が国では「虎の図」を画いた長崎系画人の「猛虎図」は有名である。其の初期の作品の一つに神戸市立博物館所蔵の南蛮船来航図屏風の中に、檻に入れられ担がれた虎が描いて

ある。これは、長崎入港のポルトガル船が献上品として運んできた南方系の虎であり、当時の長崎の人達は此のとき虎をみてはるはるである。

男の子は虎のように勇猛にと言うので、江戸時代となり五月五日の男の節句の祝いが盛んになると、床の間に虎の図をかけたか、虎の人形などが多く造られるようになってきた。

然し江戸時代に虎は殆ど輸入されていないので、我が国の人達は中国人が持ち渡ってくる虎の絵画や唐蘭船によって時によって持ち渡られる虎の皮などによって勇猛なる虎を想像し、長崎の画人達は中国人が描いた虎の図を基本に多くの作品を描いている。

江戸時代、虎が長崎に持ち渡られた記録はただ一度だけ記されている。それは「長崎実録大成・巻十五」の記録である。

享保十九年甲寅年（一七三四）阿蘭陀船二艘入津、唐船三拾壹艘入津

一、正月十八日於西役所、唐人戯曲有之

一、入津の阿蘭陀船より牡馬六疋並に虎壹疋率渡（以下略）
通航一覧巻二百四十五阿蘭陀国御用物等の享保十九年の條には「牡馬六匹率渡之」とのみ記してあり虎の事は記述がないので、虎は出島上陸後、持ち帰ったのであろう。

この虎の来航によって長崎の画人達が描いた虎の図は真に迫るものがあると言ひ、其の代表的画人として享保十六年（一七三一）十二月幕府

此の暦法が完成したと論考されている。

前述したように暦法にいう十干とは「我等の生活の根幹にあるものとして五行が説かれ（書経洪範編）、その五行とは木火土金水であり、五行には強弱があり「強を兄・弱を弟」と記してある。そして、其の「木の兄」を現わすのに「甲」の文字をあて、「木の弟」に乙の文字をあて以下丙丁戊と綴ったのが十干であると記してある。

十二支は中国の古代天文学（天時）を基本にして十二ヶ月を考え、其れに子丑寅の文字をあてたと言う。又一説には「子」の文字は「し」と読み、子の音は滋に通じ「万物の芽ばえ滋る事」を現わし、「丑」は紐に通じ、「ひも」の意を持ち「まだ充分に発展せず紐でくくられた状態」を指し、「寅」は演に通じ「万物が演然として始めて地上に生ずる意をあらわす」と記してある。十二支は「物の生育する様を十二支の文字をあてて現らわしている」と述べた著書もある。

以上この十干と十二支の考えを暦学にあてはめ、先述の十干の最初の「甲」の文字を、十二支最初の「子」の文字を組み合せ「甲子」とし、次いで此の「甲子の年」を始めとして出発し、次は「乙丑」となりこの組み合わせが再び「甲子の年」に還ってくるのは六〇年を要し、其の年を還暦と言った。

次に今年の「庚寅」の文字の意味を調べてみると、庚は更であり万物が肅然として更たまることあり、寅は前述のように「地上に始めて生ず」とあるので「今年は何か新しい事が始まる良い年」になるのではないだろうか。

次に私は、昨年の正月号にも記したが、十二支の文字（子丑寅…）にそれぞれ十二種の動物を選んで配したか其の由来は未だ「わからない」そうである。寅の文字は虎。日本には虎はいないが中国の古文獻には、虎は百獣の王であり、靈獣の一つで西方にあり「白虎」と記してある。「虎の威を借る狐の話」は御承知ですね。地獄の図を見ていたら地獄

の要望もあつて来航した清朝の画人沈南蘋に直接指導をうけた神代熊斐（一七二一—一七七二）の「虎之図」は最高のものであると評されている。「近世叢語」にも熊斐の虎之図について次のように記してある。

熊斐・嘗て大府の命を奉じて虎を書きて装す、たまたま蛮人虎を貢す、其の真象を写さんと欲す、乃ち筆硯を持ち衆と共に觀に行く、斐・竹を以これを粹す、虎すなわち怒つて頭を擡ぐ…斐・神色自若として図に取りて返る。

私はこの熊斐の着色虎図を、一つは名古屋市の徳川美術館で、他は長崎の旧家で見せて戴いた。実に良く描いてあつた。

今一人、虎の図の名手として長崎御用絵師の家系に渡辺秀詮（一七三六一—一八二四）がいる。秀詮は直接に出島の虎を写生したわけではなかったが、祖父達も御用絵師であり虎をみていた。秀詮の画技については「花卉翎毛人物山水の画法にすぐれ、尤も虎を描く事に長じ、時人・秀詮の虎と称せり」と「長崎画史伝」に記されている。

他に、長崎を代表する「猛虎画」としては昔から光源寺所蔵のものが有名で、長崎市史（上巻）巍々山光源寺の佛像宝物等の項に次のように記してある。

猛虎図 梅蘭齋筆 紙本淡彩 竪四尺参寸八分、横参尺寸

梅蘭齋は伝不詳としてあるが中国清朝の画人であると伝え、箱書に「享和二年（一八〇二）改装」と記してあるので、其れ以前に寺に寄進されたものであろう。

長崎本蓮寺でも私は清人作の水墨虎の図を見せて戴いたことがある。

風信

○今年も寅年というが、旧暦の一月一日以後にならないと、本当の寅年にはならないと友人に言われたので、旧暦の一月一日を調べてみたら今年は二月十四日であった。

○そして、冬が終り立春を迎え、季節を分ける節分の日は二月三日とあつたので、今年も旧暦の上では正月より早く春をむかえることになる。

○立春を迎えるまでは「寒」という。今でも寒稽古や稲荷修行、吼嚙の三味線は、長崎の町には残っているのでしょうか。

